

■研究・実践の課題（テーマ）

教育改革への一石—栄養教諭の授業への関わり方—

■主任研究者 安達内美子

■共同研究者 新谷裕

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

N市のT小学校でボランティア活動を後期から始めている管理栄養学部で教職を履修の3年次の大学生が、新しい学習指導要領を基にアンケートを作成し、これをN市の小中学校の教師に対して回答してもらった。N市の小中学校の教師が、今回の学習指導要領の改訂に向け、どのような考えや関心を持っているかを考察する目的で、インターネットで2020年の小中学校の学習指導要領を閲覧し、『中学校及び小学校学習指導要領解説総則編』第3章第3節「教育課程の実施と学習評価」を基に小中同一の質問項目を考案した。調査期間は、学校数も多いので2回に分けて市内の小学校4校と中学校3校の教員186名に対して、質問紙法を用いて行った。その結果をIBM SPSS Statistic 20を使用して記述統計量と各項目間のPearsonの相関係数及び有意確率を求めた。

この結果、特に高い平均値が見られたのは、「振り返り」と「評価」に関するものであった。また、低い平均値が見られたのは「図書館活用」、「読書活動」、「図書館等の資料の活用」及び「情報活用能力」、「情報ネットワーク等の整備・活用」といったアクティブ・ラーニングに関わる分野のものである。関心の高い「振り返り」と「評価」については、他のすべての質問項目と高い相関性が見られた。問題なのは、「言語活動の充実」と「自主的・自発的な学習」である。これらは、教師の関心は然程高くないが他と質問項目との相関性は高い。このことは、今後の授業改善への影響は大きいと考えられる。これまで栄養教諭育成研究会（旧栄養教諭と語る会）でのこれまでの発表データや実際に授業を見学した資料をもとに、今後の授業改善への栄養教諭の関わり方について考察した。その結果、学級担任をしている教諭の関心や考えの弱い部分を、直接評定を行わない栄養教諭とのT.T.による授業効率を高める。特に「学校給食」を通じた専門性を生かした教育をしていくことによって、授業効果が上がる。また、今回改訂の学習指導要領の「主体的、対話的で深い学び」においては、毎日行われている学校給食を教材としてより児童生徒の主体的な学びと2人の教諭（教諭と栄養教諭）との対話等の機会も増えることによって深く学べる。また、このような学びにはより多くの評価者が必要であることも含め、アクティブ・ラーニングの実践にも通ずる。このようなことを実現していくためには、少子化によって学級数の減少により教員数の削減の歯止めを掛けなければならない。今回の調査を通して、将来栄養教諭を旨とする学生と現職の栄養教諭のつながりをつくることによって、将来両者が共に教育現場で活躍する方策を模索できた。今教育現場では、少数の栄養教諭がいくつかの学校を

巡回して食育の推進を行っている。しかし、1つの学校でも大変な仕事である児童生徒の指導を掛けもつことは大変である。この解決策として、学校教育法の改正に栄養教諭の全校配置と食の教育が行われるよう進めていく必要性を痛感させられている。